



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第3期展
「新島襄と自然科学」

3

$\frac{16}{2} = \frac{8}{1} = 8$ $12 - 8 = 4$
 $8 \cdot 4 = 12$ $12 \cdot x =$
 $8 \cdot 12 =$ $x - 4 =$

$\frac{x-4}{3} \cdot \left(\frac{8+12-x}{5} \right) 4 = x$
 $\frac{x-4}{3} \cdot \frac{32+48-4x}{5} = x$

$144 \quad 5x - 20 + 96 - 144 - 12x = 15x$
 $\frac{144}{70} \quad \frac{27}{-5} \quad \frac{22x}{22x}$
 $\frac{240}{-20} \quad \frac{22x}{22x}$
 $\frac{220}{220}$

$x = \frac{220}{22} = 10$

10-4-6-2
 10-4-6-2
 10-4-6-2

〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第3期展
「新島襄と自然科学」

会期：2016年3月18日～2016年9月末日

会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：算術ノート 江戸時代後期 新島襄旧蔵品

「新島襄と自然科学」の展示に寄せて

同志社京田辺会堂もこの4月で完成後2年目に入ります。光館（HIKARI-KAN）の展示は今回が3期目、展示テーマは「新島襄と自然科学」です。

新島襄は牧師、教育者として知られていますが、彼が日本人として最初に取得した大学卒の学位は普通のバチェラー・オブ・アーツではなくバチェラー・オブ・サイエンスでした。この称号がギリシア・ラテンの古典語の学力不足と関係していたとはいえ、いずれにしても、新島は脱国以前にも物理学や数学、航海術を学んでいますし、帰国後創立した同志社英学校では物理も教えていましたので、彼が自然科学に親しんでいたことはまちがいありません。

今期のテーマの展示は大きく4つの時代に分けられます。

(1) 脱国前の新島はオランダ語や英語の原著で物理学、数学、航海術、測量術などを学んでいました。ある日、江戸湾沖にオランダの軍艦（黒船）の威容を目の当たりにしてからは、軍艦教授所に入所し、本格的に数学、航海や測量の方法論を学ぶこととなります。

(2) 密出国後、新島はフリップス・アカデミーやアーモスト大学でリベラル・アーツ教育を受けますが、先述したように、慣れない古典語を中心とした人文系の科目よりも、親しみのある自然科学—数学や地質学など—を中心に学びを進めました。

(3) 新島は、帰国後、創立した同志社英学校で、牧師として聖書やキリスト教を教えますが、そのほかにかつて学んだ物理学も講義しています。また、彼は医学校を含めた総合大学を構想していて、資金不足から医学校設立は断念したものの、同志社病院と京都看病婦学校の設立にはこぎつけることができました。

(4) 新島の科学に対する熱意に共鳴した J.N.ハリスより大口の寄付が寄せられ、これを基に1890年、ハリス理化学校が船出しました。のちの工学部や現在のハリス理化学研究所はこの伝統の上に立っています。また、病院と看病婦学校とハリス理化学校は、さらに今日の京田辺理系学部、女子大の看護・薬学系学部につながっていきます。

今回展示することはできませんでしたが、一言付記しておきたいことがあります。19世紀後半の最大の科学思想である進化論に関して、新島はアメリカの神学界で繰広げられたダーウィン論争を目撃しています。帰国後1878年には、進化論生物学者でもある牧師ギュリックを同志社に招いて進化論を講義させています。新島は科学とキリスト教・良心とを調和させた形でともに日本に導入しなければならないと考えました。時代が進むとともに科学は宗教を排除するに至っていますが、他方科学者に高度の良心が要求される今日、新島が後世に残した「科学と良心の調和」という課題は今後ますます重要になってくるように思います。

今回の展示を通して新島および同志社の自然科学との関わりについて認識を新たにさせていただければ幸いです。

同志社大学キリスト教文化センター所長

2016年3月

目次

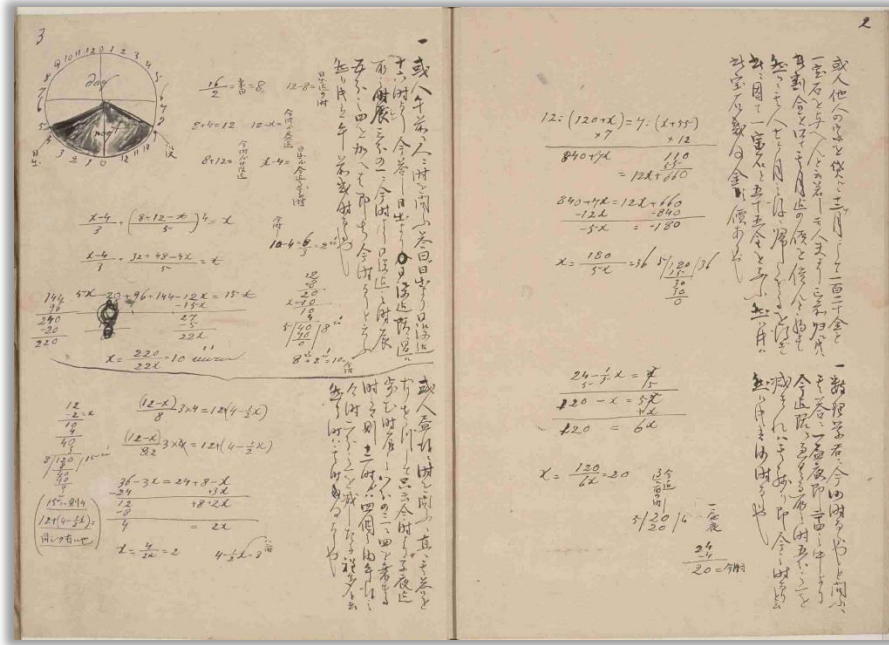
主催者挨拶

「新島襄と自然科学」の展示に寄せて……………	1
展示テーマ「新島襄の日本とアメリカでの学び」……………	3
展示テーマ「同志社での学び」……………	12
資料リスト・使用写真リスト……………	21

展示テーマ

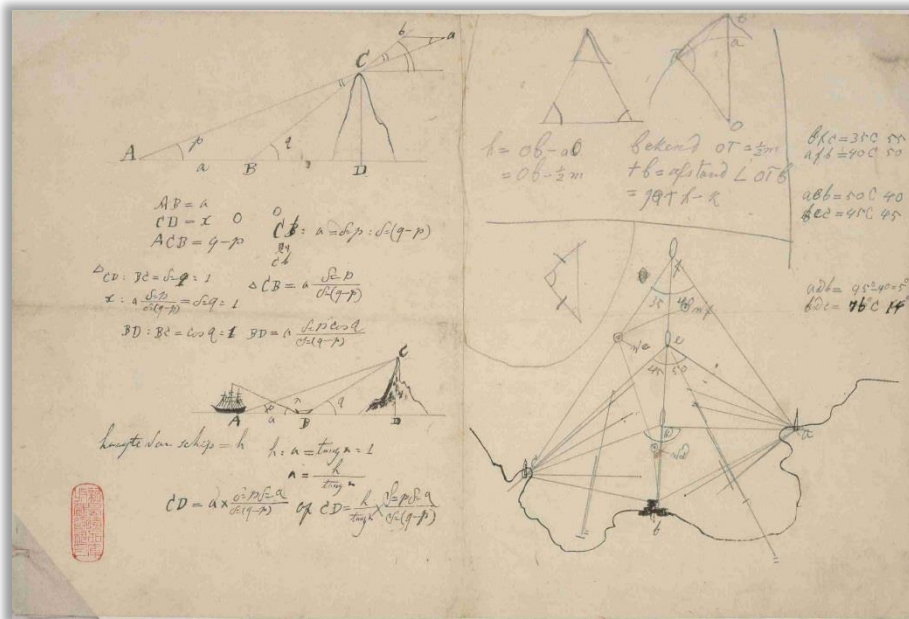
「新島襄の日本とアメリカにおける学び」

新島襄は幼年期から青年期にかけて、武士としての素養から、西洋の学問、キリスト教まで実に多様な学びを経験しました。なかでも、時間を費やした学びが、数学や航海術、測量術といった実学から解剖学、生理学、建築史など広範な範囲に及ぶ自然科学でした。密出国後に新島が在学した米国のアメリカの中・高等教育機関での学びも、自然科学が中心です。ここでは新島の江戸とアメリカにおける自然科学の学びの一部を紹介します。



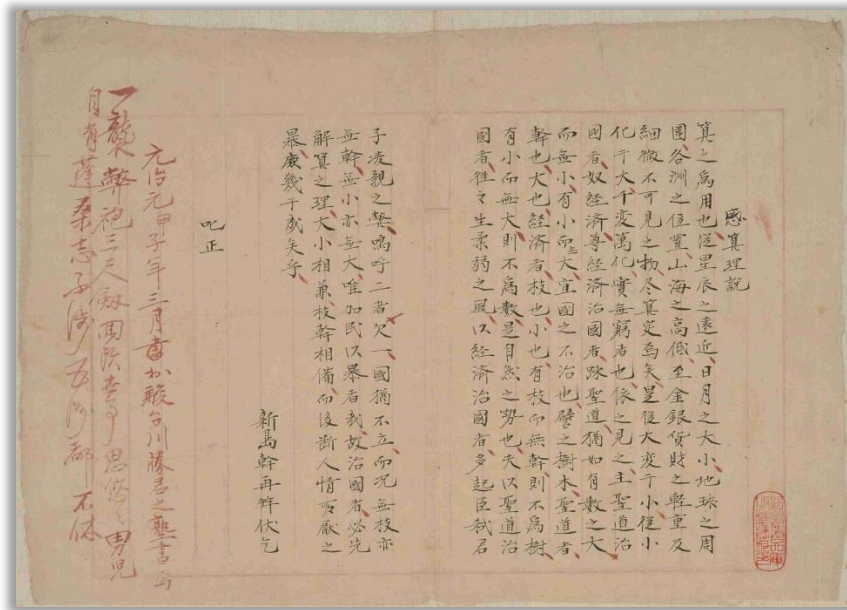
算術ノート (複製) 江戸時代後期 1冊 25.5×18.5cm

新島が、代数学を中心に、設問と解答を書き込んだノートです。設問は文章題が中心で、密出国をする前に江戸で生活していたころに使用されていたと考えられます。



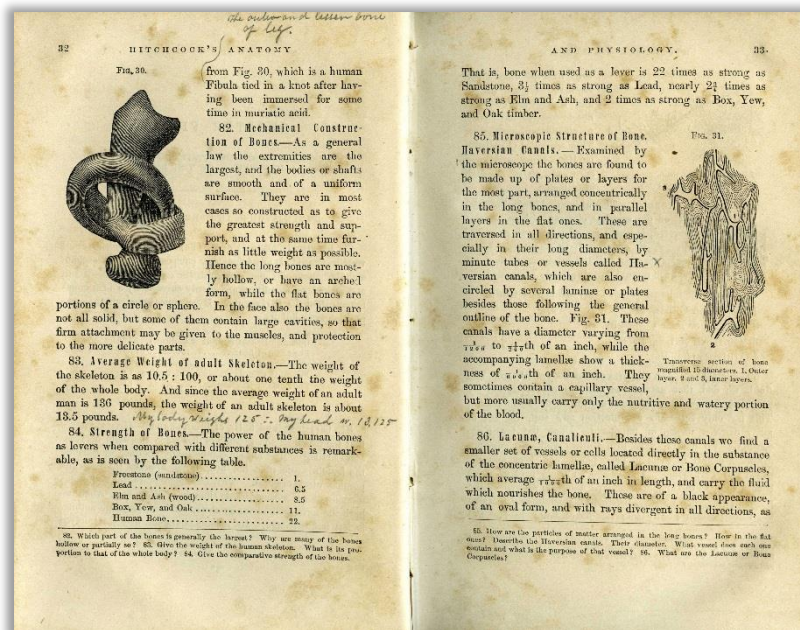
測量術に関する資料 (複製) 江戸時代後期 3枚 27.5×41cm

新島が海岸測量の演習のために使用したものと考えられます。主に三角関数で導き出した距離や角度を書き込んだ図です。



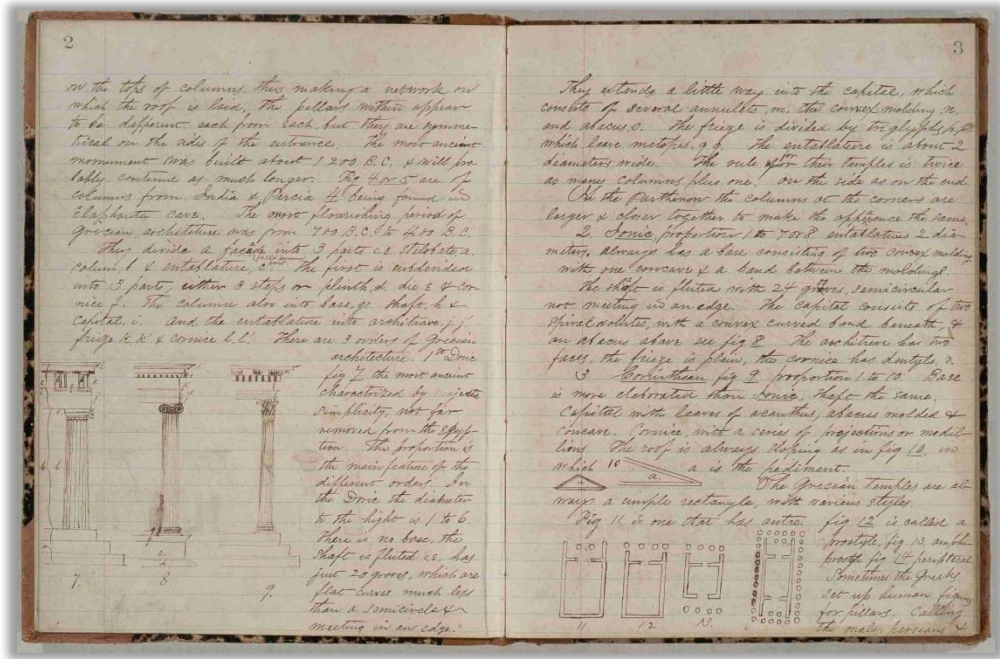
感算理説 (複製) 1864年 (元治元) 1枚 26×37cm

1864年 (元治元) 3月、新島が函館遊学に出発する直前に書いたものです。朱で書かれた漢詩が当時の心境を表しています。



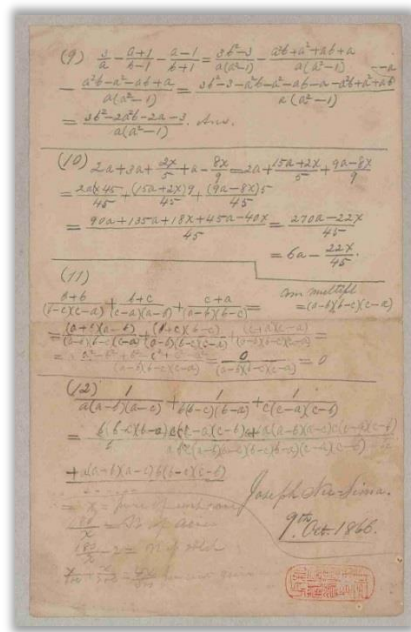
Elementary Anatomy and Physiology (複製) 1860年 1冊 20×12.4cm

新島がアーモスト大学時代に使用していた生理学・解剖学の教科書です。展示しているページは人骨に関する分野です。「83 成人の人骨の平均的な重さ」という項目では、新島が自身の体重 125 ポンド (約 56.7kg) から骨量 13.125 ポンド (5.95kg) を導き出した書き込みがあります。



建築史ノート (複製) 1860年代後半 1冊 26.5×20cm

新島がアーモスト大学時代にまとめたと考えられるノートです。ところどころに説明に適した挿絵が挿入されています。新島がアメリカで自然科学を広く学んだことを示す資料のひとつです。



数学ノート断片 (複製) 1866年 1枚 23.5×12.4cm

代数学の基礎問題の演習ノートです。1866年10月9日の日付から新島がアメリカのフィリップス・アカデミー在学時に使用したと考えられます。途中式の記入ミスが散見されますが、同じく新島が在米時に自然科学を学んでいたことを示す資料の一つです。

<江戸での学び>



「万世御江戸絵図」

新島襄は1843年（天保14）江戸城東側にある安中藩邸で生まれました。以来、21歳の時に函館に行くまで、この場所を主に生活の拠点としています。この間、新島は漢学や書、絵、蘭学そして、自然科学も学びました。なかでも、江戸の築地にあった軍艦操練所で、約2年間航海に必要な算術を中心とした自然科学を学びました。

<江戸の外へ>



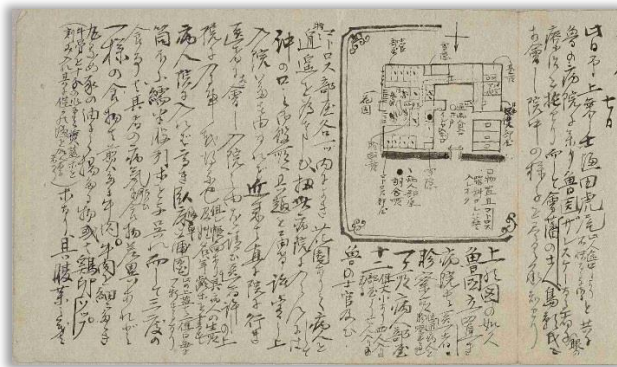
快風丸模型



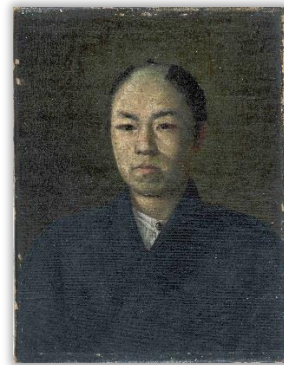
ワイルド・ローヴァー号模型

新島を江戸の外の世界へと導いた船が3隻あります。備中松山藩が所持していた快風丸と、アメリカ船籍のベルリン号とワイルド・ローヴァー号です。快風丸は、江戸と玉島（岡山県）の往復航海を通じて新島に江戸の外の世界を知らしめました。再度、乗船することになったときには、新島を開港地の函館に運びます。一方、ベルリン号とワイルド・ローヴァー号は函館から密出国を敢行した新島をアメリカへと導きました。これらの船は、航海術などを通じて自然科学を学ぶだけでなく、新しい文明との出会いをつなぐ役割を担いました。

<函館での学び>



新島襄「函館紀行」(部分)



原田直次郎作「新島襄肖像画」

21歳を迎えた新島は、安中藩から許可を得て函館に向かいます。当初は武田塾で学ぶ予定でした。理由は外国人と接触し、学ぶことができると考えたからです。しかし、塾長である武田斐三郎が不在であったため、最終的にはロシア正教司祭ニコライのもとに身を寄せ、日本語を教えながら学ぶこととなります。この間に診察を受けたロシア病院が強く印象に残ったようです。医療費無料、最新の設備、充実した患者へのケアを知る一方で、その結果、函館の人心がロシア人に向かい、後年の憂いとなるのではと危惧を抱きました。新島が密出国を敢行するのはこの約1ヵ月後です。

<アメリカで学んだ自然科学>



フィリップス・アカデミー



新島襄 (フィリップス・アカデミー在学時)

アメリカに到着した新島は、彼が乗船してきた船の持ち主であるA. ハーディーに引き取られ、3つの教育機関で学ぶ機会を得ました。なかでも、最初に学んだフィリップス・アカデミー、次の進学先のアーモスト大学での新島の学びは自然科学が中心でした。当時のアメリカの教育機関では特定の学校を除き、古典語（ギリシャ語とラテン語）中心の人文科学と自然科学を学ぶことが通例でした。特にアカデミーでは大学受験用に古典語を修め、大学ではその能力を運用することが重視されました。そのためか、アメリカに来て間もない新島が自然科学に学びの比重を置いたことが想像されます。卒業時の学位は Bachelor of Science (通常は Bachelor of Arts) です。

<アンドーヴァー神学校時代の新島襄>



アンドーヴァー神学校時代の新島襄、学友、スタッフの集合写真 新島襄（アンドーヴァー神学校在学時）

新島はアーモスト大学卒業後、ハーディーとも相談の上、アンドーヴァー神学校で学ぶことを決意し、1870（明治3）年9月に特別コースに入学しました。神学校では、ニュー・イングランド神学を中心に、牧師・宣教師にふさわしい知識と教養を身につけるべく勉学に励みました。また、在学中の1872（明治5）年には岩倉使節団から通訳を委嘱されて文部理事官田中不二麿に随行し、田中とともに欧米8カ国の教育施設や病院、新聞社などを見学しました。西洋の教育を間近で見た新島は、欧米における人間教育の価値とキリスト教感化の重要性を実感し、その後の自身の教育観を形成していきました。

<ラットランド演説>



油彩画「ラットランド演説」



グレイス教会

アメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣されることになった新島は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたボードの第65回年次総会最終日に挨拶のため登壇しました。この時初めて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約5,000ドルの寄付の約束を得ました。この寄付は、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



今出川校地 同志社礼拝堂

開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週3回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

<オープン・プログラム (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 手話入門クラス



今出川校地 公開講演会

1958 (昭和 33) 年 4 月にキリスト教文化センターの前身である宗教部が主催した 4 つの研究会を基にして、「公開講座」がスタートしました。1981 (昭和 56) 年の国際障害者年を機に「手話」と「点訳」の講座を開設。2010 (平成 22) 年度からは名称を「オープン・プログラム」へと変更し、その後も公開講演会の開催や多様な講座の新規開講などにより、一層の発展を遂げています。これまでの受講生は 9,000 人を超え、学生のみならず市民の皆さんも多数参加されています。開講している講座は、キリスト教文化センターのホームページをご覧ください。

<http://www.christian-center.jp/>

<Doshisha Spirit Tour (キリスト教文化センター主催) (熊本キャンプ/安中・会津キャンプ) >



新島襄旧宅 (群馬県・安中市)



熊本洋学校教師ジェーンズ邸 (熊本市)



熊本バンド奉教之碑 (熊本市花岡山)

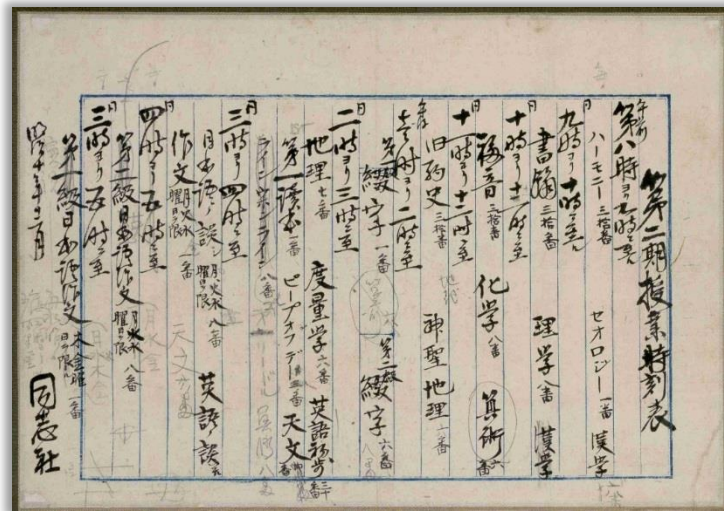
同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった精神と伝統があります。キリスト教文化センターが主催する Doshisha Spirit Tour は、事前学習と現地でのフィールドワークを通じて建学の精神を体感し、同志社を見つめ、自らを省みようとする試みであり、同志社ゆかりの地である「熊本」と「安中・会津」を隔年で訪れています。

熊本は、のちに日本のキリスト教史において「熊本バンド」と呼ばれ、設立当初の同志社を形作った俊才たちを生み出した土地。安中は言うまでも無く、新島襄の祖父の地(安中藩)であり、会津は同志社草創期に新島の「同志」となった山本覚馬、そして新島の妻・八重を育んだ地です。

展示テーマ

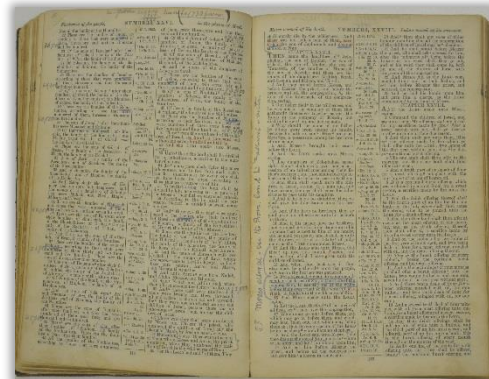
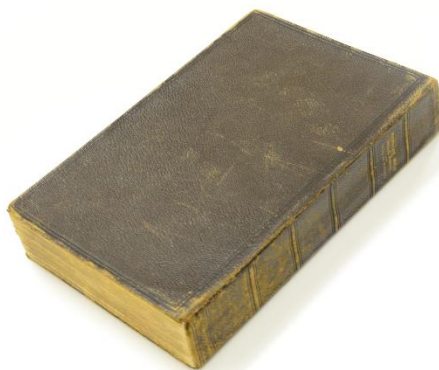
「同志社における学び」

1875年（明治8）に開校した同志社英学校は、その設立当初は人文科学、自然科学、そして基督教に関わる科目が総合的に組み合わせられたカリキュラムで運営されていました。年月が経つにつれ科目は細分化しますが、基督教を徳育の基本とする教育の姿勢は堅持されてきました。新島が永眠した1890年（明治23）ごろからは、同志社内に専門教育を実施する学校が設立され始めますが、そのような学校においても基督教を軸とした徳育は決して崩れることはありませんでした。ここでは、創設期の同志社での学びの本質を示す資料の一部を紹介します。



草稿「第二期授業時刻表」及び「授業時間表」(複製) 1877年、1878年 1巻

開校3年目2学期(学年は秋始まり)の時間割に関する2つの草稿です。授業時間は午前8時から午後17時までの8時間(昼1時間休憩)で、漢学、算術、理学、綴方など、文理を問わずなるべく幅広く学ぼう構成されています。また、神学、福音などに加え、キリスト教関連の副読本である『Peep of day』も使用されるなど、キリスト教主義学校としての特色を見出せます。その他、日本語や英語での演説、英作文の授業が実施され、プレゼンテーション能力の育成も重視されていたことがわかります。



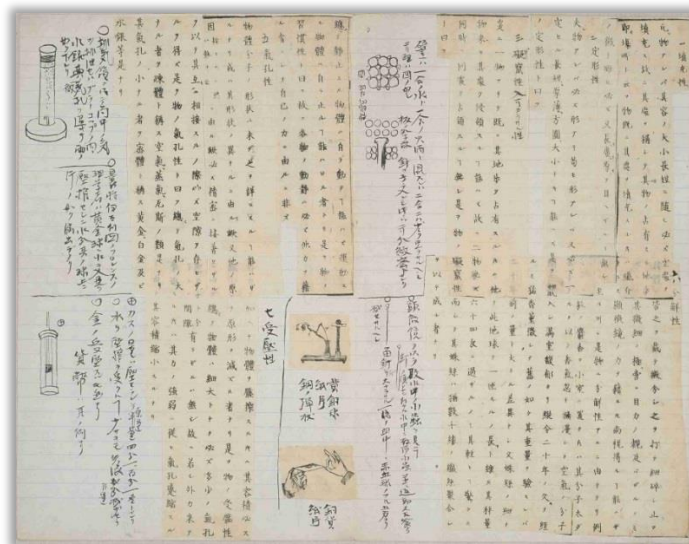
新島襄旧蔵聖書(複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていたJ.M.シアーズ(Joshua Montgomery Sears, 1854~1905)より贈られた英訳聖書。これより前に新島は漢訳聖書を手にしていますが、それは一部でした。英文聖書を手にしたことで、初めて全文を目にすることになりました。この聖書の中にある、手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。



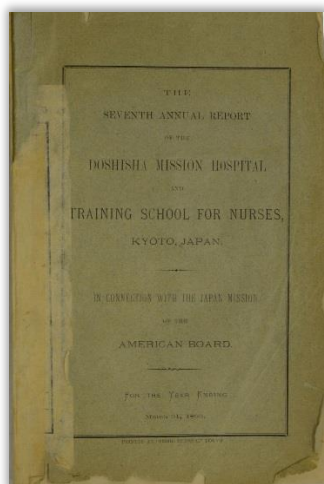
自責の杖 (複製) 年不詳 3点 最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880 (明治13) 年4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく校長である自分の責任である、として自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰にかかる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれてきました。



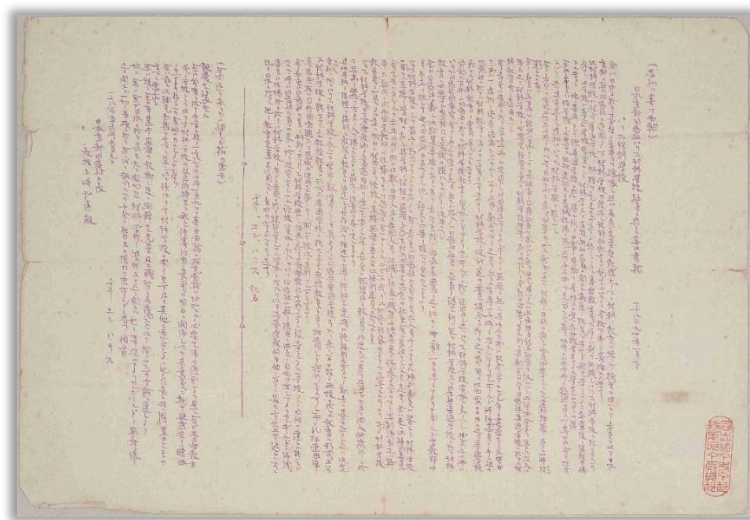
物理学ノート (複製) 明治時代 1枚 32×21cm

新島襄によって作成された、教員の授業用ノートと考えられます。1881年 (明治14) に新島は英学校第4学年の物理を担当することになっており、その指導のために作成された可能性があります。新島が物理を担当したのはこの時のみです。内容は宇田川準一訳『物理全志』(原著はG. P. Quackenbos, *Natural Philosophy*) の総論から、物質の性質に関する部分をまとめ、書籍の該当ページを切り貼りし作成されています。



The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses, 1893 (複製) 1893年 1冊 14.5×22.5cm

新島襄により同志社大学設立運動が展開されて以降、同志社では専門教育機関が充実しつつありました。そのさきがけが、1887年(明治20)の同志社病院及び京都看病婦学校の開校です。新島は当初医学校の設立を目指しましたが、資金繰りに苦しみ断念せざるを得ず、それでも病院を開業します。この年報は、開校から7年後の病院と学校の状況をうかがい知れる資料です。病院と学校の開校以降、自然科学の専門的指導を行うハリス理化学学校、社会科学を中心に扱う政法学校が開校しますが、財政難のため、短期間で相次いで閉校となってしまいます。



同志社社員宛 J.N.ハリス書簡日本語訳 (複製) 年不詳 1枚 28×40.7cm

ハリス理化学学校開校ならびにハリス理化学館建設の多大な貢献者である J.N.ハリスが同志社社員(現在の理事に相当)に充てて寄せた英文書簡の日本語訳です。回覧用に作成されたと考えられます。建物(現・ハリス理化学館)建築費用や公債購入による資産運用、理化学学校専門の寄宿舎建設等、10万ドルの寄付の詳細な運用方法を希望として伝えています。ハリスの実業家としての見識が文脈から伺われます。

<開校当初の今出川キャンパス>



今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮



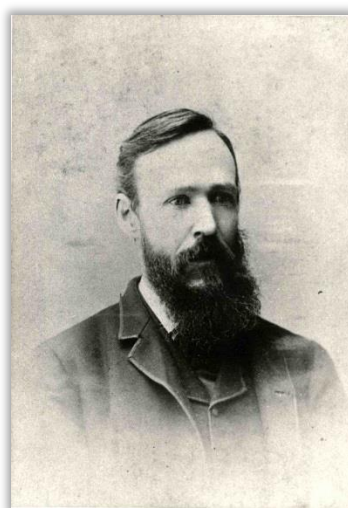
薩摩藩邸跡碑

同志社英学校最初の専用校舎は、木造の教室兼寮 2 棟と食堂で、在学生の多くは寄宿舎生でした。寺町通（現在の新島旧邸のある場所）の仮校舎から、今出川への移転は、開校翌年の 1876（明治 9）年 9 月でした。この土地は、新島襄が 1875（明治 8）年 6 月に、山本覚馬の力添えで購入した薩摩藩邸跡です。キリスト教禁教の高札撤去後も、キリスト教に対する反発が残る時代に、内裏（現在の京都御苑）の真北、京都五山第二位の相国寺の門前に校地を構えることになりました。

<デイヴィスとラーネッド>



J.D.デイヴィス



D.W.ラーネッド

J.D.デイヴィスと D.W.ラーネッドは、ともに同志社の発展に生涯の多くを捧げたアメリカン・ボードの宣教師です。デイヴィスは、設立時から同志社の教育と運営の両面に尽力し、ラーネッドも多種多様な講義を受け持ち、日本で最初に経済学の講義を行ったことで知られています。同志社の振興に大きく貢献した二人の名前は、京田辺校地の「デイヴィス記念館」と「ラーネッド記念図書館」に冠されています。

<初期同志社のキリスト教と自然科学>



原田直次郎作「山崎為徳肖像画」



山崎為徳著『天地大原因論』

19世紀中ごろまでは、自然神学がキリスト教と自然科学を強く結び付けていました。自然神学とは聖書のように啓示されたもの以外を通じて、理性的に神の存在を知るという考え方です。よって、法則性が明確な現象、あるいは説明不可能な現象などは神の存在と結びつけて考えられてきました。この関係に一石を投じたのが1859年のダーウィンによる『種の起源』、すなわち進化論の発表です。新島が滞在した1860年代後半から70年代前半は自然神学の影響がまだ残っていました。創立されたばかりの同志社英学校においても進化論と自然神学の関係は論じられていたようです。1878年(明治11)には東京大学と時を同じくしてJohn Thomas Gulickを招いて進化論の講義をしています。また、英学校第1期生山崎為徳が1880年(明治13)に出版した『天地大原因論』は自然神学を論じたものです。

<同志社礼拝堂 (チャペル) >



竣工当時の同志社礼拝堂



竣工当時の礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885(明治18)年12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」、「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。現在も礼拝堂は宗教教育の中心的な場を担っています。

ポスターパネル

< 書籍館 (現同志社有終館) >



大正時代の書籍館



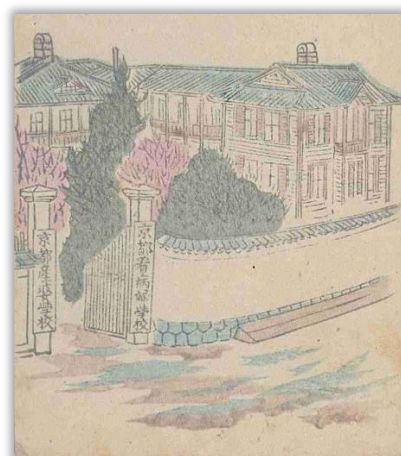
明治時代の書籍館内部

1887年(明治20)に竣工した同志社の初代図書館。内部には書庫と閲覧室に加えて、自然科学の実験室、そして新島の執務室があったと言われます。新島は学校における図書館の重要性について、しばしば演説や手紙の中で触れました。特に同志社大学設立運動時の演説草稿には、参考事例として海外の大学図書館(主に蔵書数)を頻繁に挙げています。新島は豊富な蔵書や施設の充実は、学校の高い学問水準の実証と考えていたようです。

< 同志社病院・京都看病婦学校 >



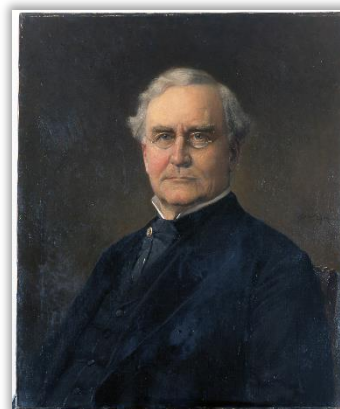
京都看病婦学校校舍(1893年ごろ)



京都看病婦学校版画入封筒(部分)

1886年(明治19)開院・開校。現在のKBS京都がある場所にかつてありました。新島は当初医学校の開設を目指し、協力者であるJ. C.ベリーとともに教派を超え資金集めに奔走していました。しかし、諸事情から開校資金の目処が立たず、最終的には病院の開院と看病婦学校の開校に落ち着きました。これらは同志社で最初の自然科学の専門教育機関となります。しかし、財政的に困窮した同志社理事会は1897年(明治30)以降これらの実質的な管理を医師の佐伯理一郎に委譲します。その後、1906年(明治39)に病院は廃院となりますが、学校は1951年(昭和26)まで存続しました。

<J.N.ハリスとハリス理化学学校>



竣工時のハリス理化学館 ナポレオン・サロニー作「J.N.ハリス肖像画」

J.N.ハリスはアメリカ・コネティカット州セイレム生まれ、同州ニュー・ロンドンにて20歳から商業に携わって成功し、ハリス商会を設立します。後には、本業とともに銀行の頭取や製薬会社の社長をも兼務するなど、財界で成功した人物でした。また、教育・宗教関係への多額の寄附者としても知られていました。ハリスは新島の理化学教育に対する熱意に賛同し、同志社へ10万ドルを寄付します。その一部がハリス理化学館建設に充てられ、同時にハリス理化学学校が開校しました。ただし、ハリス理化学学校は財政難のため、7年で閉校になります。同志社における理化学教育の再興は、1944年（昭和19）同志社工業専門学校開校のときでした。現在のハリス理化学研究所はハリス理化学学校の伝統の上に立ち、革新的な研究を続け、学生の教育・研究の活性化を促進しています。

<キリスト教文化センター学生スタッフの活動>



クリスマス・リース作り講習会



チャペル・アワー司会

キリスト教文化センターの多岐にわたる事業を教職員とともに支える存在として、学生スタッフが活動しています。かつては、チャペル・アワーの司会やクリスマス燭火讃美礼拝での聖劇出演などが活動の中心でしたが、これらに加えて、在学生を対象とした「クリスマス・リース作り講習会」の開催、教会の礼拝への参加、SNSを利用した情報発信、フリーペーパー「YES!!!」の発行など、近年そのフィールドは広がっています。学生スタッフの募集は1年を通じて行っていますので、関心のある方はキリスト教文化センター事務室までお尋ねください。

ポスターパネル

<Doshisha Spirit Week (キリスト教文化センター主催) >



同志社大學應援団による演舞



講演会



キャンパスめぐり隊

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった建学の精神と伝統があります。Doshisha Spirit Week は、キリスト教主義教育や創立者新島襄に触れ、同志社人としてのアイデンティティを高めることを目的として2003年から始まり、毎年春学期（5月末～6月初旬ごろ）と秋学期（10月末～11月初旬ごろ）に1週間開催されています。期間中には、学内外からのゲストスピーカーによる講演会、建学の精神や同志社の歴史に関する資料展示、キャンパス内を中心に見学する「キャンパスめぐり隊」や同志社大學應援団による演舞などさまざまな企画を行っています。

資料リスト (展示品は全て複製)

資料名	作者・著編者	年代	法量(cm)	員数	所蔵先
展示テーマ「新島襄の日本とアメリカにおける学び」					
算術ノート	新島襄	江戸時代後期	25.5×18.5	1冊	同志社社史資料センター
測量術メモ	新島襄	江戸時代後期	27.5×41	3枚	同志社社史資料センター
感算理説	新島襄	1864年	26×37	1枚	同志社社史資料センター
Elementary Anatomy and Physiology	Edward Hitchcock, Jr	1860年	20×12.7	1冊	同志社社史資料センター
建築史ノート	新島襄	1860年代後半	26.5*20	1冊	同志社社史資料センター
数学ノート断片	新島襄	1860年代後半	23.5×12.4	1枚	同志社社史資料センター
展示テーマ「同志社における学び」					
授業時間表	新島襄	1877年、1878年	25.5×37	1巻	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	不詳	不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
自責の杖	不詳	不詳	長さ60	3片	同志社社史資料センター
物理学ノート	新島襄	明治時代	32×21	1枚	同志社社史資料センター
The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses.	-	1893年	14.5×22.5	1冊	同志社社史資料センター
理科学校寄付に関する件(同志社社員宛・和訳)	不詳	不詳	28×40.7	1枚	同志社社史資料センター

写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「新島襄の日本とアメリカにおける学び」			
江戸での学び	「万世御江戸絵図」	1854年	同志社社史資料センター
江戸の外へ	快風丸模型	現代	同志社社史資料センター
	ワイルド・ローヴァー号模型	現代	同志社社史資料センター
函館での学び	新島襄「函館紀行」	1864年ごろ	同志社社史資料センター
	新島襄肖像画	1890年か	同志社社史資料センター
アメリカで学んだ自然科学	フィリップス・アカデミー	現代	同志社社史資料センター
	新島襄肖像写真	1867年	同志社社史資料センター
アンドーヴァー神学校時代の新島襄	アンドーヴァー神学校時代の新島襄、学友スタッフ	1870年代前半	同志社社史資料センター
	新島襄肖像写真	1870年代前半	同志社社史資料センター
ラットランド演説	油彩画「ラットランド演説」	1960年代か	同志社社史資料センター
	グレイス教会	現代	同志社社史資料センター
チャペル・アワー	今出川校地同志社礼拝堂でのチャペル・アワー	現代	キリスト教文化センター
オープン・プログラム	京田辺校地 手話入門クラス	現代	キリスト教文化センター
	今出川校地 公開講演会	現代	キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Tour	新島襄旧宅(群馬県・安中市)	現代	キリスト教文化センター
	熊本洋学校教師ジェーンズ邸(熊本市)	現代	キリスト教文化センター
	熊本バンド奉教之碑(熊本市花岡山)	現代	キリスト教文化センター
展示テーマ「同志社における学び」			
開校当初の今出川キャンパス	今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮	明治時代	同志社社史資料センター
	薩摩藩邸跡碑	現代	同志社社史資料センター
デイヴィスとラーネッド	J.D.デイヴィス	明治時代	同志社社史資料センター
	D.W.ラーネッド	明治時代	同志社社史資料センター
初期同志社のキリスト教と自然科学	山崎為徳肖像画	不詳	同志社社史資料センター
同志社礼拝堂(チャペル)	『天地大原因論』	1880年	同志社大学人文科学研究所
	竣工当時の礼拝堂	明治時代	同志社社史資料センター
同志社書籍館(有終館)	竣工当時の礼拝堂内部	明治時代	同志社社史資料センター
	書籍館	大正時代	同志社社史資料センター
同志社病院・京都看護婦学校	書籍館内部	明治時代	同志社社史資料センター
	京都看護婦学校校舎	1893年ごろ	同志社社史資料センター
J.N.ハリスとハリス理化学校	京都看護婦学校版画入封筒	不詳	同志社社史資料センター
	竣工時のハリス理化学校	1890年	同志社社史資料センター
キリスト教文化センター学生スタッフの活動	J.N.ハリス肖像画	不詳	同志社社史資料センター
	クリスマス・リース作り講習会	現代	キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Week	チャペルアワー司会	現代	キリスト教文化センター
	同志社大学応援団による演舞	現代	キリスト教文化センター
	講演会	現代	キリスト教文化センター
	キャンパスめぐり隊	現代	キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第3期展

「新島襄と自然科学」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2016年3月18日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture